

りべらしおん

研究所ニュース
No.46

「りべらしおん」は、フランス語で「解放」という意味です。

発行：社団法人 福岡県人権研究所

〒812-0046 福岡市博多区吉塚本町13-50 福岡県吉塚合同庁舎内 TEL 092-645-0388 FAX 092-645-0387

Mail:fukuokajinkenken@happy.odn.ne.jp URL:http://www2.odn.ne.jp/fukuokajinkenken/



あいさつする森山理事長

第一〇回 通常総会 記念講演は、鈴木常勝さんへ

六月一九日(日)午後一時三〇分より第一〇回通常総会が開催された。

最初に、東日本大震災で犠牲となられた方々に黙祷を捧げ、総会に入った。

塚本博和さんを議長に、第1号議案(2010年度事業報告) 第2号議案(2010年度収支報告・監査報告) 第3号議案(2011年度事業計画) 第4号議案(2011年度収支予算) 第5号議案(2011年度役員体制) が承認された。

総会の中で出された質疑や意見は、会員の拡大についてであった。

研究所としてはぜひ会員の皆様にも、知り合いの方に声をかけていただき、一人でも多くの会員が増えるよう、ご協力をお願いしたい。

午後三時より「だまし絵としての国策紙芝居―若者たちの感想と意見―」というテーマで、鈴木常勝さんに講演していただいた。

講演は、国策紙芝居の魅力や、その奥に仕込まれた巧妙な仕掛けやカラクリ、現代の若

者がどのよう感じているのかなど、示唆に富んだ話であった。また、紙芝居の実演や、紙芝居の変遷の歴史など、興味が尽きない内容であった。

国策紙芝居は、戦後GHQの命令によってその大半が焼却処分されたため、現在では大変貴重な資料となっている。その中で、鈴木さんが見せてもらったり、収集したりしたものが、三〇〇点あまりになるという。



講演する鈴木常勝さん

かつて国策紙芝居は、町内会や学校で実演され、その語り手は町内会役員、教員、役場の職員であり、アドリブなしで重々しく、かつ楽しく語るように決められていた。

鈴木さんが紹介した「チョコレートと兵隊」という国策紙芝居は、朝日新聞の報道や東宝

による映画化などでヒットしたため、紙芝居になったものである。

鈴木常勝さんの著書を、研究所でお預かりしているので、来所された際にお買い求めいただけます。



国策紙芝居の「チョコレートと兵隊」

三月十一日に発生した東日本大震災で被災された方々への義援金を会場呼びかけたところ、二、五〇〇円集まりました。協力して下さいました皆様には、感謝申し上げます。

この義援金は、去る五月一二日に「震災の中のふれあい」というテーマで講演いただきました、石巻市在住の樋口伸生さんにお届けすることになりました。樋口さんは、いまだ避難所生活を余儀なくされておられる被災者の皆さんに役立つものを届けると、約束して下さいました。

総会に参加されていた皆様、ご了解のほどよろしく願います。

「震災の中のふれあい」講演会

講師 樋口伸生さん(宮城県石巻市在住)

五月一二日(木) 一五時三〇分より

於福岡県人権啓発情報センター視聴覚室



被災地の状況を話す樋口伸生さん

以下、樋口さんの講演内容を紹介する。
三月一日に発生した東日本大震災の時は、まだ石巻市は雪に覆われていた。
始め津波は見えず、雪煙の向こうから、ブルドーザーを一列に並べ、それが一斉にこちらに向かってくるようなすさまじい音と、建物を解体しているかのような轟音とともに、あっという間に津波が押し寄せた。

みんなは山の高台にある神社まで急いで避難した。ただただ果然と見守るしかなかった。津波は避難した山を巡り、川の上流に向かって家や車を飲み込んでいった。

地震が収まったところで、中学校の体育館に向かった。そこでは連日のように「遺体をどうしよう」という会話が交わされ、私に幾人もの人達が相談にいられた。(樋口さんは、浄土宗の僧侶である)

一ヶ月の避難所生活を終え、アパートでの仮暮らしを始めたのは、避難所生活を余儀なくされている方々に、遺族とのやりとりが辛いのではないかという思いと、毎日のように片道三時間ほどかけて、遺族とともに他県や他市町村まで遺体を運び火葬に立ち会うというお勤めをするためであった。

早朝、バスに遺族とともに乗り込み、遺体はトランクルームに安置しての移動であった。私のお寺は、形だけはおろして残ったものの、千数百世帯があった周囲は全て津波で流されてしまった。それに加えて、六〇センチメートルほど陥没してしまい、潮が上がりってくる。そこに檀家さんの家もあったわけであるが・・・。

そこで私は、ここでは今後僧侶としての仕事はできないのではないか。今ここで亡くなられた方々を弔うのが、最後のお勤めになるのではないか。それならば、精一杯お勤めをさせていただこうと決意した。

避難所生活では、精神的に段々と落ち込んでくる。それに追い打ちをかけるのが段ボール等で作られたパーティション(仕切り)である。現在では昼間、若い人達は外出しており、高齢者だけが残っている状態である。パーティションの中で、誰とも会話することなく生活している状況では、高齢者がとても気がかりである。

また、様々な支援物資が届けられ、それは本当にありがたいことであるが、支援物資の要不要は、避難所の管理者が判断する。それに伴って、支援物資の偏在が生じ、欲しい人のもとにその物資が届かない、あるいは大量にあるために届けられた物資を処分しなければならぬといった事態も生じている。

復旧・復興には、かなりの年月がかかると思うが、精一杯生き抜いていきたいと思っている。

山本作兵衛さんの炭鉱画、日記類がユネスコの「世界記憶遺産」登録へ

五月二五日、ユネスコは、コレクティブ・メモリー(人類が共有すべき記録)として、田川市や福岡県立大学が所蔵・保管する山本作兵衛の絵画や日記など六九七点について、「世界記憶遺産」に登録することを決定した。昨年三月、オーストラリアの産業考古学者マ



作兵衛さんの炭鉱画 石炭・歴史博物館提供

イケル・ピアソンさんを通じて、市や大学が独自に申請していた。国内初の登録となる。ユネスコは、作兵衛の炭鉱画、日記類が、炭鉱という場から日本の産業・経済発展過程を如実に描いており、経営者や行政等が記録したのではなく、炭鉱労働者にしか描けないことを、負の面も含めて具体的に描いていることが、世界でも類を見ない貴重な記録であると、高く評価したという。

田川市石炭・歴史博物館館長の安藤龍生(研究所理事)や、福岡県立大学学部長の森山沾一(研究所理事長)も、山本作兵衛の炭鉱画、日記類の収集・保管・申請に尽力されたメンバーの一員である。

山本作兵衛は、「子や孫に炭鉱を伝えたい。ヤマの生活を描き残しておきたい」という思いから、明治中期から昭和にかけての約五〇年間の記録を、絵画や日記に描き留めている。研究所としては、当時炭鉱労働に関わった人達からの聞き取りなどをやっていきたい。

「いのち・愛・人権」展2011

『部落解放運動の原風景と北九州市の人権文化の創造』と題した企画展が北九州市小倉駅前のコレット(井筒屋)五階で開催される。会期は二〇一一年一〇月九日～一六日の八日間。研究所にとって本企画は、二〇一〇年二月に福岡市総合図書館で開催した「部落解放運動の原風景」の第二弾となる。松本治一郎・井元麟之史料を中心に、今回は北九州に係したのもも展示する予定である。

六月二七日、本企画展の第一回実行委員会が部落解放同盟小倉中央集会所で開催され、研究所から石瀧所長代行、西原事務長、柳井が参加し、北九州市内からは行政、運動体、市民団体の担当者二五名が集った。冒頭、石瀧所長代行より企画展の趣旨が説明され、続く

て人権フォーラム21の黒田耕司会長が実行委員長に選出された。

会期中は、福岡県人権研究所収蔵史料や北九州市の人権団体紹介パネルの展示、北九州市制作の人権啓発ビデオの上映、さらに田川市石炭・歴史博物館の協力によるユネスコ世界記憶遺産となった山本作兵衛さんの炭坑画(実物複製)等を展示することが決まった。表題である「いのち・愛・人権」展は北九州市で過去三回行われている。一九九〇年と九四年に井筒屋パステルホール、九八年には旧そごうが会場となり、多くの市民が集った。一三年ぶりの「いのち・愛・人権」展は、規模や会場名は異なるが、九八年と同じ場所での開催となり、今回も多くの市民の来場が期待される。

第62回部落解放同盟福岡県連合会 定期大会開催

『松本龍前復興大臣への猛省文書配布』

小川洋新福岡県知事挨拶など、定期大会は、七月二七日(土)午前九時半より、福岡市立早良市民センターで、会場一杯の代議員約四五〇名結集のもと開催された。今大会は、組織内外の激動を反映し、緊張感ただようものであった。東日本大震災犠牲者への黙祷の後、女性部の解放歌、青年部の水平社宣言朗読で開催された。

開会挨拶で原伸一財務委員長は、松本龍前復興大臣の言動について反省を促し、来年の全国水平社創立九〇周年の成功を期した。

組坂委員長代行も松本前委員長の言動について、昨年一〇月の名古屋議定書、水俣病補償問題などの成果を賞賛しつつも、「別人のようない言動」に対し、猛省を促した。そして、厳しい時代だからこそ、回結して、人権侵害救済法をかちとる必要性を強調した。

全国水平社創立九〇周年集会を京都で行うと挨拶した大野全国副委員長は、ジャーナリスト稲積謙次郎氏の「事実と真実は違うからこそ、真実の追究を」を引用して、松本龍前復興大臣の言動について述べた。

新知事として挨拶した小川洋氏は、「旧通産省課長時代に同和問題を担当した」こと、「県民幸福度日本一の福岡県になるためには、県民一人ひとりの人権意識を高め、人権の確立が必要」と断じた。そして、「実効性のある被害者救済法の必要性」を述べた。

例年挨拶する各党国会議員は、国会開催で秘書のみの紹介が行われた。地域格差、職業格差、人間格差をなくす必要を、八女市出身で獣医師でもある蔵内自民党連代表は、挨拶の中で述べた。その後、吉岡正博書記長による報告提案が行われた。

各挨拶で、来年三月三日の全国水平社創立九〇周年成功が言われたが、二〇一三年五月一日の全九州水平社創立九〇周年については、

誰も言及しなかった。

私たちの研究所としては、全国水平社創立九〇周年と全九州水平社創立九〇周年を連続してとらえ、九州・全国にアピールしていく必要がある。

理事長 森山 沾一

第30回九州地区

部落解放史研究集会

七月二十八日(木)～二十九日(金)の二日間、熊本学園大学高橋守雄記念ホールで開催された。

開会行事に引き続き、報告Ⅰ「熊本県の被差別部落の成り立ちとその周辺」というテーマで、山本尚友さん(熊本学園大学教授・熊本県部落解放研究会)が報告された。

報告内容は、肥後藩における近世初頭の被差別部落の規模については、現存する四カ所の天正・慶長検地帳を検証すると、きわめて小さなものであったということである。

また、近世になると肥後藩では、盛んに干拓・開拓事業が進められ、そのことが人口増につながるのがあるが、わけてもエタ身分の人口増は高率であり、史料での田畑所有の広さがその裏付けとして明らかになっている。

次に、被差別部落内に建立されている唐崎神社に注目し、他地域には存在しないことが

ら、近江国より大分を経由して肥後藩に入った来従者が、被差別部落の成立に関わっているのではないかと推定された。

最後に、様々な史料から肥後藩は、エタ身分の支配に消極的ではなかったのかという、肥後藩の独自性も示された。

二日目は、報告Ⅱ「慶長期福岡藩の『かわた高』をめぐる」というテーマで、石瀧豊美さん(社団法人福岡県人権研究所副理事長・インタキ人権学研究所所長)から報告があった。



報告する石瀧豊美さん

まず、福岡藩独自の呼称や検地のありよう、石高についてなど詳しく説明され、本論に入った。

慶長五(一六〇〇)年、筑前国に入った黒田長政は、慶長七(一六〇二)年に検地を行った。年貢率を下げる意図をもって、五〇万石の目標を設定し、西部の方から実施した。

元和二(一六一六)年、幕府の命により知行高を五〇万二千四百余石として報告する。その年の九月、秀忠の名で五〇万二千四百一六石に確定された。

しかし、実際にはその石高決定には複雑な経緯があったという。つまり、判物高(領地高)、郡帳高(内証高)、郷帳高、免(年貢)帳高など、いくつもの種類が存在したわけである。そして、それぞれのレベルに応じて、郡高、村高にもいくつもの数値が生じることになった。

郡帳高(内証高)とは、幕府に届け出た表高に対し、「御内証」という意味である。そして、この方が実際の検地結果に近く、幕府に届け出た表高は、何らかの操作を受けた架空の数値ということになる。

また、福岡藩では村を「本村」「枝郷」「枝村」の三種に分けていた。「枝郷」は本村から高を分けた村で、「枝村」は高は分けないが、実態としては独立した村という意味で使われている。

その他、「かわや分無役」の意味や、「かわ

た高」についても、福岡藩独自の事例を史料に検討を加えながらの、興味深い報告であった。

イベント情報

第三一回特別展

一〇月三十一日(月)まで

福岡県人権啓発情報センター 特別展示室

(クローバープラザ7階)

「民衆の力」を学ぶ

― 渋染一揆・筑前竹槍一揆 ―

今回の特別展は、「民衆の力」とは何なのかについて学びあうために企画された。

「渋染一揆」「筑前竹槍一揆」を中心に構成され、江戸幕末から明治維新にかけての民衆の動きやその背景を学び、これからの人権文化の創造へとつなげたいとの思いが、この特別展には込められている。

言うまでもなく、「渋染一揆」は、一八五六(安政三)年に岡山で起こった、それまでの差別をさらに強める別段御触書に反対して、被差別部落の人々が起こした一揆である。非武装で強訴を行い、要求を勝ち取った、当時としては画期的な一揆である。

また、「筑前竹槍一揆」は、一八七三(明治六)年に起こった全国最大規模の一揆である。様々な要求が叫ばれるとともに、参加した人々によって被差別部落の家々が焼かれるという悲惨な出来事も起こった。

ぜひこの機会に、皆様もご観覧を。問い合わせ

電話 〇九二(五八四)一二七一



図書紹介

●会員の本の紹介●

『つれづれ人権日誌 歴史が遺した痛みに再生の手がかりを求めて』

林力 著 発行せいうん

一八〇〇円＋税



林力さんは、本研究所の顧問です。著書の帯にはこのように書かれています。「今、歴史から学ぶこと。低迷する経済、増加する自殺者、無縁社会の拡大、声を削がれた若者たち、現実から目をそらす人々。敗戦後、目ざましい経済成長を遂げる一方で、真に豊かな成熟社会への道筋を置きざりにして来た日本。東日本大震災という未曾有の脅威を経験した今だからこそ、歴史が遺した痛みから再生への手がかりを探し、学ぶ。」

八六歳になられた今も、林力さんは毎日原稿用紙に向かい、執筆活動を精力的になさっています。この本は、「八月に思うこと」「いさもの一つとしての人間」「働くということ」「不思議にいのち永らえて」「暴力は人間の弱さ」「ハンセン病 療養所はどこへ」など五十稿からなっています。

*問い合わせは、研究所まで。

『カワウソ村の火の玉ばなし』

部落解放同盟中央執行委員長である組坂繁之さん(会員)が、被差別部落の人が虐げられた歴史や人権への理解を子どもたちに深めてもらおうと、一九八七年に刊行した『火の玉のはなし』を、児童文学作家の山下明生さん(静岡県)に再構成を依頼し、人気絵本作家の長谷川義史さん(大阪市)が絵画を担当して、この度『カワウソ村の火の玉ばなし』として出版された。

この話は、福岡県の筑後地方に伝わる民話に基づいており、組坂さんは「子どもの理屈抜きの感性で差別の不条理を理解してほしい」と語っている。

定価 一八九〇円
発行 解放出版社

新会員紹介

・石橋 良容 (大牟田市)

お知らせ

●八月一三日(土)から一五日(月)まで、お盆のため閉局します。

●教育部会

教育プロジェクト 合同開催

日時 九月一七日(土) 一四時～
会場 福岡市立堅粕 人権のまちづくり館

内容 「同和教育運動に

参加していく契機になったこと」

講師 林 力
参加費 無料

*どなたでも自由に参加ください。

新会員の勧誘にご協力下さい。

機関誌『リベラシオン』裏表紙に「入会のご案内」が掲載されています。別紙の入会案内がご入用の場合は事務局までお申し出下さい。

研究所日誌 (2011年6月～7月)

- ・ 6月 6日 (月) 事務局会議
- ・ 6月 7日 (火) 人権ネットフィールドワーク 下見
- ・ 6月11日 (土) 理事会15～
- ・ 6月13日 (月) 事務局会議
- ・ 6月16日 (木) 『リベラシオン』142号納品
- ・ 6月19日 (日) 第10回通常総会 13:30～
- ・ 6月24日 (金) 第6回松本・井元研究会 18:30～
- ・ 6月25日 (土) 地方史フェア (図書販売)
- ・ 6月27日 (月) 事務局会議 北九州市企画展第1回実行委員会 16～
- ・ 6月28日 (火) 人権プロジェクト「石瀧塾」18:30～
- ・ 6月30日 (木) 芦屋町住民意識調査業務委託契約
- ・ 7月 2日 (土) 啓発部会 13:30～ 編集委員会 14～
- ・ 7月 4日 (月) 事務局会議
- ・ 7月 7日 (木) 芦屋町住民意識調査表発送
- ・ 7月11日 (月) 事務局会議
- ・ 7月12日 (火) 北九州市企画展事務局会 16～
- ・ 7月17日 (日) 執行理事会 10～
- ・ 7月22日 (金) 福岡県調整課実地検査 10～
第7回松本・井元研究会18:30～
- ・ 7月25日 (月) 事務局会議
- ・ 7月26日 (火) 人権プロジェクト「石瀧塾」18:30～
- ・ 7月27日 (水) 県連定期大会 (早良市民センター) 10～
- ・ 7月28日 (木) ～29日 (金) 九州地区部落解放史研究集会 (熊本市)
- ・ 7月30日 (土) 編集委員会 13:30～
昨年度の「リベラシオン」執筆者・読者の交流会 (ココロンセンター) 16～